

市民の新聞

うらやす情報

[浦安市の人口] 162,569人(平成25年7月現在) [浦安市の世帯数] 73,110世帯(平成25年7月現在)
 [記事・広告のお問合せ] TEL 047-383-9166 FAX 047-351-4576 E-mail info@urayasu-joho.com
 [発行] (有)プレスサービス 〒279-0041 浦安市堀江6-1-24 [発行日] 毎月10日 [発行部数] 60,000部 (1部105円税込)

創刊おめでとうございます!



株式会社ダイニチホールディングス

ダイニチ Dプライフ 舞浜倶楽部
 http://dainichi.co.jp http://dprife.co.jp http://maihamaclub.co.jp

Dr.竜の「診察ノート」

「煙草の害」

タバコには遺伝子を傷つけて発がんさせる作用があります。そのリスクは若い人ほど高く、成人の平均に比べて15歳以下では30倍、19歳以下では10倍にもなります。「がん」にならない喫煙者もいますが、これはタバコに含まれる発がん物質を不活性化させるGSTMTIという酵素を持っていて、全体のわずか10%しかない特別な人です。90%の人は必ず「がん」になるのです。



「肺組織を破壊し、動脈硬化を促進させる」
 喫煙は1服ごとに肺の組織を破壊し、やがて慢性閉塞性肺疾患(COPD)になります。呼吸困難を感じます。これは肺が70%近く破壊されてからですので、その時禁煙しても遅く、耐え難い呼吸困難が死まで待ちます。

煙草は毒薬 90%の人はガンに

第1話

浦安ふじみクリニックには、この2年間で99人の方が禁煙外来を受診しました。その内2回以上受診した方の禁煙成功率は85%です。本人に家族のため自分のために禁煙しなくてはと言った意思さえあれば、禁煙は成功します。

喫煙者は「ニコチン依存症」という病気です。脳内のニコチンが少なくなくなると、タバコを吸わなくてはという禁断症状となります。いくら根性で禁煙しても脳がそれを覚えていて、久しぶりの煙草がさらにおいしく感じしてしまうのです。

「がん」は遺伝子に傷がついておこる病気。ヒトの細胞の核にあるDNAに組み込まれた遺伝子情報がゲノムです。ゲノムは、アデニン(A)、グアニン(G)、シトシン(C)、チミン(T)の4種類の塩基が結合する30億の塩基対からなる生命の設計図です。この遺伝子に傷がついて、がん遺伝子が活性化したり、がん抑制遺伝子が不活性化して、1個の細胞から無限に増え死なない「がん細胞」ができ、その発生母体である人の命を奪うのです。「がん遺伝子」が増えると、いわばアクセルが踏まればばなしの状態となり、「がん抑制遺伝子」が減ると、いわばブレーキが利かない状態になって、がん細胞が無限に増殖するのです。

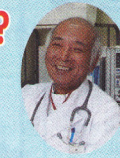
動脈が細くなり、心筋梗塞や脳梗塞なども引き起こします。糖尿病の喫煙者の死亡率は非喫煙者の2.6倍、高血圧症は3.8倍、高脂血症は1.8倍になります。肥満、高血圧、糖尿病、高脂血症が合併していれば、喫煙は自殺行為です。

竜 崇正 りゅう・むねまさ。浦安ふじみクリニック院長。浦安市富士見2-18-9。1943年生まれ。千葉大学医学部卒業。国立がんセンター東病院長手術部長などを歴任。2005年千葉県がんセンター長に就任。2011年4月から現職に。「自分のすべてを患者さんに提供してベストを尽くす」などを心がけている。

Dr.竜の「診察ノート」

「がんは遺伝子に傷」

「がん」は遺伝子に傷がついておこる病気。ヒトの細胞の核にあるDNAに組み込まれた遺伝子情報がゲノムです。ゲノムは、アデニン(A)、グアニン(G)、シトシン(C)、チミン(T)の4種類の塩基が結合する30億の塩基対からなる生命の設計図です。この遺伝子に傷がついて、がん遺伝子が活性化したり、がん抑制遺伝子が不活性化して、1個の細胞から無限に増え死なない「がん細胞」ができ、その発生母体である人の命を奪うのです。「がん遺伝子」が増えると、いわばアクセルが踏まればばなしの状態となり、「がん抑制遺伝子」が減ると、いわばブレーキが利かない状態になって、がん細胞が無限に増殖するのです。



人はなぜ「がん」になるのか? 遺伝子のわずかな変化が引き起こす

第2話

生命の維持に必要な遺伝子の突然変異で「がん遺伝子」が発現。1982年にがん遺伝子RASが発見されました。このRASの発現で「がん」の治療は大きく進歩するものと期待されました。しかしRASは全ての生物の正常細胞の中にもあったのです。がん細胞のRASを正常細胞のRASと比較する研究で、6500の塩基の中の一つの塩基がG

に特異的な複合的遺伝子異常を探し、それに対抗する新薬の開発に、世界中がしのぎを削っています。

しかし、強い遺伝子異常がそのがんの主な原因の場合、その治療薬(分子標的治療薬)が有効な場合もみられません。EGFR(細胞増殖因子)が多く発現している非小細胞肺癌には、イレッサが極めて有効で、多発転移や肺転移が消失する方も少なくありません。しかし多くの「がん」では複合的な遺伝子異常に対する治療は容易ではありません。各「がん」に特異的な複合的遺伝子異常を探し、それに対抗する新薬の開発に、世界中がしのぎを削っています。

竜 崇正 りゅう・むねまさ。浦安ふじみクリニック院長。浦安市富士見2-18-9。1943年生まれ。千葉大学医学部卒業。国立がんセンター東病院長手術部長などを歴任。2005年千葉県がんセンター長に就任。2011年4月から現職に。



クリニックが地域の「コミュニティ」の場に

浦安ふじみクリニックで7月5日(金)、バーベキューパーティーが開催された。今回で4回目となるこの会は、竜崇正院長の「クリニックをもっと気軽に健康相談ができる場にしたい」という思いから、定期的開催されるもの。今回も、患者やその家族、地元ゆかりの人々などたくさんの方が訪れた。

院長の「カンパイ、の声から始まったパーティーは、参加者が持ってきた食材あり、待合ではギターに合わせてびりりで歌う催しもあり大いに盛り上がった。参加者は「ここが本に病院なのか忘れちゃそう」と笑顔。院長は「んな催しは珍しいと思けれど、患者さんが自分に自分の健康のことを話してくれる場になれば」と語った。

☎355・5353